

那須野・磐梯山巡検（9月4日～6日）

当初予定されていた東海地方巡検が交通上の問題から不可能となり、2年生一同失望の面持ちでいたところ、浅海先生の計らいで那須野・磐梯山巡検に速やかに変更が決まり、ほぼ予定通りの日程で巡検を行なうことができた。今回は各自の事前研究のあと、実際にフィールドを回り、地形面や地質の露頭、それをベースにした土地利用等を観察するいわゆる実地観察に主眼をおいた。

4日11時30分、大田原市の市街地のほぼ中心にある旅館前に集合。荷物をクリノメーターやハンマーに持ち変えてすぐ出発。市街地のはずれにある高台での昼食後、那須野盆地の地形面やその構成地質に関する説明をうけ、蛇尾橋をふり出しに徒歩で地形面の実地観察を行なった。道路より数m高い金丸原面の台地に広がる水田は、昭和20年から30年頃開かれたもの。厚いローム層に覆われて水の便が悪く、農業開発が遅れたのである。途中からバスで高岩に向かう。高岩は、蛇尾橋の真西約7.5kmの地点にある那珂川の峡谷状の河岸で、那須野盆地の東端の最高部。固結度の高い砂岩であるため段丘の先に突出しており、ハンドレベルを使っての測定では水面までが80数m、高岩にぶつかって逆巻く川の流れは小規模ながら美しい景観を呈している。またクリノメーターを使って走向・傾斜の測定も行なった。

5日8時30分出発。西那須野駅からバスで千本松へ。この一帯は酪農や草地の試験場、放場等粗放的な土地利用がなされているが、これは火山灰土による酸性土壌や水利の悪条件によるものと思われる。ただし水利の悪条件は那須疏水が引かれて以降克服された。ここで那須疏水第四分水の水門を見学。疏水におうところが大きい地域である。広大な農場は防風林に囲まれ、大層静かな空間を作っている。再びバスで北上し、那須扇状地の扇頂部へ向かう。山の迫る上の内は、山から小さな沢水を引いて利用してきた自然発生的農業集落である。少ししか離れていないが、下車した関谷宿（宿場町として発展した）とは趣を異にする。扇

頂部は那須疏水とは無縁の、他の那須野の集落とは水利の面でずい分違っている地域である。

午後は大部分移動時間に費された。すなわち西那須野駅に戻り、そこから東北本線と磐越西線で猪苗代へ向かったのである。郡山から1時間ほど揺られると車窓の景観が一面中水田となり、皆到着が近いことを知った。この日は東北大学地理学施設を宿泊に使わせていただいた。

6日はいよいよ磐梯登山である。8時30分登山口に到着。険しい山道を這い登り、10時過ぎには沼ノ平に出る。磐梯山の地肌向き出しの旧火口壁を左手に見ながら（我々にとって）最後の急坂を登ると突然、眼前に見事な景観が開けた。標高約1500m、はるかに前方の桧原湖や五色沼を一望に見渡すことができ、一同それまでの苦労をすっかり忘れる思いであった。爆烈火口は所々草が生えている程度の不毛の地で、赤茶色を呈する銅沼や白煙をあげている温泉など不気味である。火口の絶壁は年に数cmほど風化作用によって削られているとの先生の説明を聞き、火口をのぞきこむのが思わずためらわれた。11時30分頃下山開始。同じコースをとりながら前方に猪苗代湖を望む、上りとはまた違った風景を楽しみつつ、予定よりかなり早く登山口に戻り、ここに2泊3日の巡検を終えた。

巡検の途中では地理学施設において断水のハブニングがあり、朝食準備や弁当作りに5時起きしたり、登山がこたえたりで苦勞の多い巡検ではあったが、苦勞の度合いは印象の深さに比例するものである。また、地形面や地質等を基礎にした実地観察は、地理的観察眼を深めることに多いに役立ったことと思う。

最後に、巡検の間丁寧な説明を施して下さり、時に歩き疲れた我々を（先生がお若い頃苦勞した巡検の話などをして）励まして下さった浅海先生に感謝の意を表します。

（浅海教官指導 3年 佐藤央美）